

口自体、多様な顔をもつ。テロをどう捉え、それにどう向き合うか。テロは、思想の踏み絵である。そこで、現代世界の認識と価値が問われる。本稿は、その一つの絵踏みである。

I. テロリズムの解剖

スペクタクル・テロ

2001年9月11日のアメリカ・世界貿易センタービルの崩壊は、3,062人の死者という規模とともに、リアルタイムの映像によって世界に衝撃を与えた。そのスペクタクルは、「テロの時代」を實行した。ブッシュは、「これは戦争だ」と言い、「自衛権」を盾に「新しい戦争」を宣告した。「新しい戦争」は、二正面作戦を取る。まず、テロの首謀者とするアルカイダのオサマ・ビン・ラディンの探索である。探索は、彼を匿うとするアフガニスタンのタリバン政権への攻撃、大量破壊兵器をもつとするイラクのフセイン政権への攻撃と続き、両政権の崩壊、戦後「復興」、「民主主義政権」による国内平定（「和平」）の過程を踏んだ。しかし、アメリカ（と同盟軍）の軍事制圧は、反米武装闘争を煽り、また、親米／反米の部族間闘争を煽った。戦闘が続き、テロが頻発する。親米政権の国内平定は、遠い。

次に、軍事行動を正当化し、それを自国民に承諾させる反テロ・キャンペーンである。「テロは、残忍で非人道的な所業であり、その断罪は、人間（市民）の使命である」「邪悪なテロリストを匿う『テロ支援国家』も、成敗されなければならない」。こうした言説が、9・11の記憶も生々しい人々の心を捕えた。反テロ・キャンペーンは、2つの結果を生んだ。1つ、テロの意味の肥大化である。テロは、本来、政治目標の達成を期す特定の暴力を指す。しかしいまや、「テロリスト」は、反抗者一般に貼られる烙印となった。政治的な異議を唱える社会運動家は、反体制者（insurgent）からテロリストになった。テロは「犯罪の最上級を表わす言葉」[鶴飼2003.3:55]となり、さらに、邪悪なもの一般を表象する言葉となった。「政治的談話は文字通りの意味から非常にかけ離れた教義上の意味で使われている」（ウィトゲンシュタイン）。このようなテロの語の「自己脱構築化」（デリダ）の下、アメリカやイギリスで、イスラム教徒やアラブ系住民を「テロリスト」やその共鳴者に仕立てる集団ヒステリーが起きた。アメリカで、アフガニスタンへの「報復戦争」反対の意志を示した（パナマ生れの）女子高生が停学を命じられた[西谷2002:48-49]。彼女の訴えを受けた裁判所も、学校の措置を追認した。イギリスでは、2000年、治安維持法ばかりに「言論の自由」を封殺する（反）テロリズム法が制定された⁽²⁾。2つ、テロの容疑者や戦争捕虜に人権はない、という含意である。「テロは国民を殺傷する異常事態であり、テロの取締りには、超法規的措置もやむをえない」「テロリストやその共鳴者は社会の敵であり、市民権を享受するに値しない」。こうした言説が世界を席捲した。2001年11月、

アフガニスタンのカライジャンギで、暴動を起したタリバン兵捕虜が、全員（600人）殺害された [最上 2002:217]。アメリカで、イラク人捕虜の虐待やアラブ系住民の人権侵害が、頻発する。イギリスでは、2005年7月、ブラジル人青年が、爆破事件の容疑者と誤認され、いきなり銃殺された。

反テロと隠蔽

『テロリズム』は学問的用語というより一種の罵倒語であり、政治的背景を持った暴力を犯罪のコードに転写するための装置である。この言葉の濫用は悪魔払いの儀式に似ている。この言葉は何も教えてくれないのだから。したがって、この言葉を目にしたら、それがそのつどどんな問題を隠しているのかを考えてみなければならない [鶴飼 1998.9.28]。アメリカの「反テロリズム」には、テロ根絶という目標の裏に、2つの意図がある。1つ、自らの（国家）テロを隠蔽するという意図である。マサチューセッツ工科大学教授のチョムスキーは、アメリカこそ、1976年の国連安保理のイスラエル・パレスティナ和平の決議に拒否権を行使し、その後25年間、両者の紛争解決を妨害し続け、86年には、国際司法裁判所からニカラグアでのテロ活動で有罪判決を受け、87年には、テロ根絶・国際法の遵守を謳う国連決議に拒否権を行使し、さらに、特殊部隊兵士・準軍組織・諜報員等の（6万人もの）テロ専門家養成し、対ソ戦のための（アルカイダを含む）テロリスト集団を養成し、今なお、中東をはじめ世界各地でテロ活動を行っている、世界最悪の「テロリスト国家」であると指弾した（ホームページYahoo「チョムスキー」2005.9）。アメリカは、9・11テロで、「自ら蒔いた悲劇の種の果実を収穫した」（フセイン政権のコメント） [栗田 2001.10:103] わけである。

国家は、「自らのテロをテロの定義から除外する」 [松葉 2003.3:72]。テロの語は、「米国およびその雇われ国家と同盟国に影響を与えるテロに限定して使われる」（Yahoo「チョムスキー」2005.9）。そして「自分のそのときどきの事情に則して『非難するテロリズム』と『許容するテロリズム』あるいは『利用するテロリズム』を使い分ける」 [太田 2003.3:188]。こうして、いまやテロリズムは、権力用語と化している。

アメリカの「反テロリズム」のもう1つの意図は、国家の利害追求を隠蔽することである。ブッシュは、9・11テロで「これは戦争だ」と言い、「テロリズムの戦争化、戦争のテロリズム化」 [小林 2003.3:103] を図った。彼は、「既に圧倒的な軍事的優位をさらに世界中に拡張し、世界的支配を保障する別の不法に突き進むチャンスとして、この新局面を捉え」（Yahoo「チョムスキー」2005.9）、「テロ支援国家」に対する核先制攻撃の権利を保持すると宣した。そのためには、＜敵＞を邪悪な犯罪者にしておくことが必要であった。またアメリカは、第一次・第二次イラク戦争を通し、「多国籍企業を有利な状況に置き、その地域を支配するだけでな

く、湾岸地域の世界一重要なエネルギー資源の包囲を完成させた」(Yahoo「チョムスキー」2005.9)。9・11テロを利用し、アルカイダ支援・大量破壊兵器の開発を口実(今も証拠は示されていない)にイラクに軍事侵攻し、フセイン政権を倒し、親米政権を樹立し、その下で国内平定(民主化)を行い、多国籍企業を送り込み、石油資源の採掘・売買権を独占する。これが、アメリカの反テロ戦争の思惑である。まさに政治は、戦争の延長としてある。その遙か前、「1973年の第四次中東戦争以来、アメリカにとって国家テロが有効な外交手段になった」[松葉2003.3:73]。リビアのカダフィ大佐暗殺の陰謀が、その手始めであった。

テロリズムと政治

「あらゆる政治的概念は、それ自体政治的かつ抗争的である」(カール・シュミット)。テロ概念がその極にある。テロの定義はつねに論争を呼ぶ。国連総会の包括的テロ防止条約作業部会では、アメリカ・イスラエルとアラブ諸国の間で、テロの定義をめぐる対立した。その際、パレスティナの民族解放闘争がテロかどうか、議論の焦点となった。欧州共同体(EU)は、テロを「一国または複数の国、そしてその機関や国民に対し、それらを威嚇し、国家の政治、経済、社会の構造を深刻に変容させる、あるいは破壊する目的をもって、個人または集団が故意にはたらく攻撃的行為」と定義した。しかし各国の弁護士から、その定義は広すぎて、合法的な政治活動もテロとされかねないと反対された。白色テロと赤色テロの区別さえ、しばしば容易でない。テロの定義の困難には、3つの要因が介在している。1つ、だれがテロを定義するかである(定義の主体)。政府は、国家の暴力をテロとは認めない。2つ、何のためにテロを定義するかである(定義の目的)。パレスティナ人の自爆攻撃は、「テロ」ともなり、民族解放の戦いともなる。3つ、どんな暴力をテロとするかである(テロの範囲)。非戦闘員(市民)を殺傷する暴力だけをテロとするのか、戦闘員や施設への攻撃も含めるのか。この他、テロの形態や機能による定義もある⁽³⁾。いずれも、定義の困難は変わらない。

テロの目的や範囲の判断に、定義主体の利害と価値が介入する。定義の困難の原因は、ここにある。「そもそもテロを定義しようとする目的がすでにテロに対する一つの価値判断を含んでしまう」[加藤2002:25]。テロの評価をめぐる対立は、政治的対立の極限にある。結局、テロの評価は、暴力の主体・目的・背景・手段・結果・影響に照らし、個別に行うしかない。テロの背景には、貧困や政治状況へのルサンチマン、政治的無視への反抗等がある。そして、テロの評価は、評価主体の利害と価値に帰着する。これらの点を踏まえ、テロの最小限の定義を示すと、次のようになる。①政治的な目的をもつこと。これが、テロを犯罪から区別する。しかし「政治的な目的」の有無の判断は、容易でない。犯罪が政治になることもある。加藤は、大量殺戮を自己目的とするテロをニヒリズム・テロと呼ぶ[加藤

2005.4:115]。この「自己目的」の判断も、容易でない。②恐怖の喚起が企まれること。テロは、つねにプロパガンダであり、スペクタクルである。③極端な暴力の行使を伴うこと。極端とは、急激・破壊的・徹底的の意である。④法体系の根幹を揺がす非合法の行為であること。ゆえにテロの予防や報復は、しばしば超法規的措置とされる。…こうしてテロの定義は、次のようになる。「テロリズムとは、非合法的な暴力の使用によって恐怖を作り出し、それによって特定の政治的目的を達成する手段である」[松葉2003.3:71]⁽⁴⁾。

テロリズムと国家

テロには、国家のテロと反抗者（政治的・民族的な被抑圧者）のテロがある。テロに用いる手段や、テロの結果・影響は、国家と反抗者で大きく異なる。「テロリズムが弱者の武器だというのは重大な誤解である。ほとんどの武器と同じように、テロも強者が行使してはるかに大きな効果を手に行っているのだ」（Yahoo「チョムスキー」2005.9）。反抗者に許されるのは、普通、稀少で貧弱な手段だけである（他国に援助される等の場合もあるが）。イスラム教徒の殉教作戦（「自爆攻撃」）では、命が最後の手段となる。国家も反抗者も、自らの攻撃をテロとは呼ばない。国家は、「反テロ」「低強度戦争」「自衛」と呼び、反抗者は、「作戦」「闘争」「戦争」と呼ぶ。イスラム教徒は、殉教作戦を「自爆テロ」とは呼ばない。しかし、国家が〈敵〉の暴力をテロと呼ぶ力は、圧倒的である。国家は、排除すべき暴力を定義する力と、行使すべき暴力を定義する力を独占する。国家は、前者を「テロ」と非難し、後者を「反テロ」と呼ぶ。そして、「無差別テロ」さえ免罪する。空爆やミサイル攻撃で、市民は「ソフト・ターゲット」となる。「誤爆」の犠牲者は、「付帯的犠牲」(collateral damage)者となる（空爆やミサイル攻撃では、誤爆は不可避である）。「たとえば大量殺人を犯した一味がアメリカ国内の小屋に立てこもったとき、その犯罪者を倒すためには、周辺の住民の犠牲を覚悟して空爆と言う手段に訴えることができるのか」[藤原2002:223]⁽⁵⁾。国家は、「例外状態について決定できる者」(カール・シュミット)である。国家は暴力装置であり、イデオロギー装置である。「国家はいまや、核によるカタストロフをちらつかせながら個人々に恐怖と忘却の生産を強いる『テロリスト』になり下がろうとしている」[粉川1986.8.16,『図書新聞』]。

テロリズムの語源は、フランス革命のジャコバン派の恐怖政治 (terror) にあるという。テロリズムは、国家に発する。「テロリズムは権力の中心で生まれ、上層からやってくる。国家に由来しないテロリズムはない」[土佐2003.3:82]。国家は、歴史の節々でテロを用いてきた。国家による大量殺戮の例は、枚挙に暇がない。そして、国家を脅かす〈敵〉を、テロリストと呼んできた。かつて、ドイツのナチは、反ナチ・ゲリラのフランス人をテロリストと呼んだ。イギリスは、反英爆弾闘争のユダヤ人（右

派シオニスト)をテロリストと呼んだ(シャロン首相もテロリストであった)。南アフリカは、黒人解放闘争のマンデラをテロリストと呼んだ。現在イスラエルは、ジハード(聖戦)を戦うパレスティナ人をテロリストと呼んでいる。こうした国家のテロリスト呼ばわりも、枚挙に暇がない。

近代国家は、その始原より暴力と親縁関係にあった。それは、内では市民革命、外では民族戦争という暴力によって成立した。暴力は、近代国家の誕生の助産婦であった。近代国家は、「暴力を正当に独占しようとし、同時に暴力を最も組織的に、最も効率的に行使する主体として自己形成してきた」[小林2003.3:102]。これができない国家は、壊滅するしかなかった。国家テロは、国家の暴力独占の派生物である。市民社会も、国家の暴力によって成立した。ヒューマニズム(個人の尊厳の尊重)やリベラリズム(個人の自由の尊重)は、暴力によって防衛される(排他的な)平和の上にあった。だからこそ、ガンジーやキング牧師の「非暴力」も、「直接行動」という暴力なしには成立しなかった[酒井2004:198]。そして直接行動は、国家によってテロと烙印され、反テロをもって報復された。テロリズムとヒューマニズムは、近代国家の暴力の双生児であった⁽⁶⁾。「《ならず者国家》(rogue States)に対して戦争を仕掛けうる国家それ自体が、アプリアリに、その最も正統な主権において、権力を乱用する《ならず者国家》にはかならない。…国家とは、すなわちならず者である。いつであれ、われわれがそう考えるよりも多くの、ならず者国家である」[デリダ2003,訳,2003:102]。

テロリズムと価値

テロは、(政治的)暴力の一形態である。暴力と同様、テロも多種多様である。ゆえに、テロ一般の是非を論じることはできない。とはいえテロ論議に際し、最低、次のことが確認される。1つ、どんな暴力をテロと呼ぶかは、暴力行使の主体・目的・背景・手段・結果・影響に照らし、個別に判断されなければならない。その際、主体による暴力の正当化が隠蔽するものが、暴かれなければならない。また、正当性を社会に浸透させる力が、暴かれなければならない。2つ、テロを合理的に理解するには、次のような態度が、保持されなければならない。「政治的・社会的事件の場合には、行為自体を肯定する／あるいは否定する立場の相違に関わりなく、その背景を探り、よってきたるゆえんを突きとめ、それを政治的・社会的・経済的に解決する方策を模索しなければならない」(傍点は引用者)[太田2003.3:185]。テロの合理的な理解自体を、テロ肯定論と断じて非難するなど、論外である⁽⁷⁾。3つ、テロの合理的理解とは、暴力に対する「価値判断から自由に」ということではない。テロの理解には、暴力の妥当性に対する価値判断が伴う。「暴力的な者たちに対して暴力を控える事、それはみずからこの者たちの共犯者となることだ。われわれは純粋さと暴力のあいだで選択するのではなく、多様な種類の暴力のあいだで選択

するのである」(メルロ・ポンティ)。これも、一つの価値判断である。ガンジーの非暴力も、直接行動という暴力によって補完された。このような観点に立つ時、「ポストコロニアリズムは、あらゆる形態の暴力に反対する」[姜 2001:5] という議論は、首肯できない。ポストコロニアリズムで議論すべきは、暴力に反対か否かではなく、権力の暴力に抗する反抗者の暴力を、その目的・背景・手段・結果・影響に照らしてどう捉えるかにある。テロについても、問題は同じである。

「あらゆる形態の暴力に反対」の言説は、暴力を行使する主体が非対称的な権力関係にあるという、ポストコロニアリズム批判の前提に違背する。このようなヒューマニズムの背後には、人間の死はすべて等しく痛ましいという「死の聖化」がある。しかし、死もまた非対称的である。死の意味は、つねに非対称的な生者にとっての意味である。9・11テロの犠牲者は「人類の悲劇」として繰り返し思い起こされ、ツインビル跡の石碑に名が刻まれた。爆撃で日々殺されるアラブの人々の死は、忘却される。アラブの人々は、死んでなお差別される。「パレスティナ人が難民キャンプで半年もの長きにわたって殺戮され続けるという出来事、それは、パレスティナ人に記憶されるべき出来事であっても、世界の人々に記憶されるべき出来事でないのだとしたら、なぜなのだろう」[岡 2002:66]⁽⁸⁾。

ところで、反抗者の暴力が、つねに正当であるとはかぎらない。まず、反抗者とはだれかという問題がある。例えばビン・ラディンは、パレスティナ人の代行者なのか。彼の信条が、パレスティナ人のそれに近いとして、だから即代行者ということにはならない。彼が代行者であるには、最低パレスティナ人がそうだと認めなければならない。でなければ、ビン・ラディンの行為は、パレスティナ人の戦いの篡奪にもなりかねない。次に、手段の妥当性である。それは、行為の目的・結果・影響に即して判断されなければならない。その際、テロの結果、つまり、だれを何人殺傷したか、非戦闘員(市民)を殺傷したかどうか、緊要なポイントとなる。テロにおいては、非戦闘員の殺傷に最大の関心が寄せられる。テロは、本質的に「無差別テロ」である。9・11テロも、多くの「無実の市民」が殺傷された。その「非人道性」が、テロ非難を呼び、ブッシュによる「報復」の口実となった。戦闘員に対する「自爆テロ」なら、まだ暴力の行使者の絶望的な状況への憐憫の情を誘いもする。しかし、「無実の市民」を殺傷した時、憐憫の情は掻き消える。

しかしそれでも、「無差別テロ」は起きる。なぜか。そこでは、非戦闘員(市民)が戦闘員に代替されている。〈敵〉の軍力が圧倒的で、戦闘員を攻撃する力がない時、非戦闘員が攻撃される。非戦闘員の殺傷は、まず戦闘員の恐怖を煽り、彼らの士気を挫く。次に、〈敵〉の社会に動揺を与え、市民の間に恐怖を喚起する。それが、〈敵〉の政府に政策(戦争や

経済制裁等)の変更の圧力を生む。「無差別テロ」において、このようなスペクタクル効果が狙われる。テロが起こると、政府は、すぐ「テロの暴力には屈しない」と声明を出す。それは、恐怖に煽られ、政府に政策変更を迫る市民に対する、政策継続の意思表示である。

他方、「無差別テロ」は、「非人道性」に対する市民の憎悪と怒りを煽り、社会の結束を強める。また、政府の政策の正当性を高め、戦闘員の士気を鼓舞する。暴力の行使者は、「無差別テロ」の効果／逆効果を計算する。この計算を誤る時、戦いは決定的な後退をよぎなくされる。「無差別テロ」は、相反する衝撃力を内包する。それは賭けである⁽⁹⁾。

Ⅱ. 殉教者の価値世界

暴力の正当性判断

テロの合理的判断には、もう1つの価値判断が介在する。それは、暴力の倫理的な正当性に対する判断である。つまり、暴力の行使者がもつ政治的・軍事的資源に照らし、暴力が道義的で不可避なものであったか否かの判断である。暴力が道義的で不可避なものとされる時、暴力の正当性が高まる。そのためには、暴力の行使者の資源・目的・背景に対する理解が前提となる。とくに、暴力の行使者の価値観に対する共感は、決定的である。ここで、パレスティナ人の殉教を例に、道義的で不可避な暴力であるか否か、その暴力が生起する脈絡の一端を見よう。

四次の中東戦争を経て、イスラエルは、パレスティナの大半、ヨルダン川西岸とガザ地区、シリアのゴラン高原、エジプトのシナイ半島を占領した。土地を追われたパレスティナ人は、難民となり各地に分散した。国連パレスティナ難民救済事業機関によると、同機関に登録された難民は、2002年6月現在、397.4万人(ヨルダン川西岸62.7万人、ガザ87.9万人、ヨルダン168.0万人、シリア40.1万人、レバノン38.7万人)に及ぶ(ヨルダン川西岸とガザがイスラエル占領地)。イスラエル軍の占領に対して、パレスティナ人は、PLO(パレスティナ解放機構)やハマス(Hamas)等の抵抗組織を作り、イスラエル占領地の奪回・パレスティナ国家の建設をめざし、民族解放闘争を始めた。そして、弾圧・掃討作戦に対するゲリラ戦や殉教作戦が行われ、血の惨劇が続いて、現在に至っている。以下、殺戮・遺書・殉教・ジハードについて、資料により、パレスティナ人の価値世界の一端を垣間見よう(典拠は資料の末尾に示す)。「爆撃にさらされ慟哭する岩の痛みを自らの痛みとして生きる者たちの視点」[岡2002:61]で、テロを見るとどうなるだろう。

死の風景

「3歳半のラワン・アブ・ゼイドはわずかな小銭をもって姉たちと一緒にお菓子を買いに店に出かけた。イスラエル軍の攻撃がはじまって一週間、家に閉じ込められてうんざりしていた女の子たちは、激しい攻撃の束の間

の小康を利用して外に出たのだった。しかし、その数分後、ラワンはイスラエル軍の戦車によって顔と首を撃たれた。死を前にしてラワンが残した最後の言葉は『マミー、マミー』だった。娘の死から3時間後、父親のムハンマドは小さなラワンの遺体を埋葬した。彼が彼女のために残せたものは、小さなかawaiiラワンの写真一枚だけだった。12人の子供の親である45歳のムハンマドはラワンがどんなふうにも彼のもとに駆け寄ってきたのか、そして彼女が彼の腕に抱かれて眠るのがどんなに好きだったのかを話しながら泣いた。『母親は彼女を生むなり死にました。だから、私はいつもその埋め合わせをしようと頑張ってきたんです。そういうわけで、私とラワンの間の愛情は特別だったのです。私は父親であると同時に母親でもありました。彼女は本当に頭のいい子だったんですよ。3歳の子どもというよりは10歳の子どもようでした』。パレスティナ側によると、先週から始まったイスラエル軍のレインボー作戦によって殺された子どもはラワンで11人目だという。葬儀の間、イスラエル軍の戦闘機は空を巡回し、少なくとも60人以上を殺したイスラエル軍の攻撃が弱まるのではないかというラファに暮らす人々の希望を挫いた。イスラエルはラファで殺された7人の兵士の報復として攻撃を開始した。イスラエル軍は攻撃の標的は武装勢力のみであり、エジプトから武器を密輸するのに使われるトンネルを隠す家屋のみを破壊しているのだと主張している。『ラワンが戦車を運転するのでしょうか』父のムハンマドは尋ねる。『彼女がロケット砲を撃つとでも？』(傍点は引用者)(ホームページYahoo「パレスティナ」「ラファが喪に服している時に殺された子ども」2004.5.23)。

ホームページYahoo「パレスティナ」の「パレスティナ情報センター」「パレスティナ・ナビ」には、イスラエル軍によるパレスティナ人虐殺の事例が、数多く報告されている。パレスティナ人は脅され、殺されて、それに抵抗する術もない。機関銃に投石で歯向かうインティファダが精一杯である。「無実の市民」の殺戮が、日常の光景である。「まさに恋人が四肢を引き裂かれる痛みを、パレスティナ人は身をもって生きている」[岡2002:57]。その恐怖と悲痛と憎悪は、いかばかりか。この現実が、すべての出発点である。

岡真理は、パレスティナ人による9・11テロの受け止めについて、次のように言う。「アメリカが攻撃されたことをその瞬間、喜んだ者がまったくいなかったとも思えない。しかし、また、事件を受けてパレスティナでは即座に、事件の犠牲者を哀悼する集いがもたれたことも事実なのだ。……難民たちの身に繰り返し生起する虐殺の悲劇、イスラエルによる国家テロ、その犠牲者である彼女たちであるからこそ、テロルの犠牲となった者たち、あるいはそれによって愛する者を失った者たちの痛みや哀しみを、自らの痛みをもって理解しえるのだとも言えるのではないだろうか。暴力に傷つき、暴力のない世界を希求しているのは、ほかならぬ彼女たちなの

だから」[岡 2001.10:109-110]。この解釈は、説得的でない。多くのパレスティナ人が、テロの死者を悼んだのは事実だろう。しかし、アメリカに支援されたイスラエル軍に近親者を殺されたパレスティナ人が、アメリカに憎悪を抱かないはずがない。この憎悪と、テロ犠牲者の遺族への同情に心が引き裂かれたというのが、パレスティナ人の心情ではなかったろうか。近親者を殺した者にも死を。これは、普通の人間の心情である⁽¹⁰⁾。まさに「1つの死には、その死を悼む多くの者たちの、それぞれに固有で特別の、悲痛な哀しみがある」[岡 2001.10:108]。赦しは、逆説ながら、この心情への共感を経てはじめて、現実のものとなる。このことと、メディアのパレスティナ人報道にみるオリエンタリズムとは、別次元の問題である。たしかに、「パレスティナ人たちは悲しみに沈む世界に対して驚喜する者として対峙させられた」[臼杵 2002.10:96]。

殉教者の遺書

<両親への遺書>「親愛なる母と父よ。幼い私を夜遅くまで起きて世話をしてくれた両親よ。私を育てるのに骨を折り、真正なるイスラム教徒の道を歩ませてくれました。あなたたちは私が心休まるようにどのような苦勞も厭いませんでした。私は何もお返しできません。ただあなたたちが天国の最上の場所で偉大なる神に巡り会えるようお願いするだけです。母よ。悲しみに耐えてください。神があなたの息子を殉教者として選んだことに対して神に感謝してください。殉教者となった息子は神にあなたのことを取りなすでしょう。父よ。大学の学問を終了し、世俗の職業に就くことができなかったことをお詫びします。しかし、私は殉教者としての地位を神に与えられました。私たちと神の敵を恐れさせる聖戦の任務が本日やって参りました。天国でお会いしましょう。」

<同胞への遺書>「同胞たちよ。私は不帰の旅路に出ることを決めました。この、虫の羽ほどの価値もなく、影のように消えてしまう、楽しみの少ない世界に戻ることはないでしょう。私は偉大なる神が私を受け入れ、預言者や信仰者や善行者らとともに真実の座を与えるようお願いしています。神よ。私は私の魂と体を差し出すことに戸惑いはありません。神がそれを受け入れることを祈念します。私は武器をとって、殉教者の道を歩み、ユダヤ人が私たちの息子たちを毎日殺しているように、彼らに破滅と破壊を味あわせるでしょう。」(イスマイル・アルマサワビー、アクサー大学4年、シャータニア難民キャンプ、2001年6月にガザ北部で殉教、イスラエル兵2人を殺害。傍点は引用者)[朝日新聞, 2001.9.15]

父母を愛する善良な青年が、同胞が殺され続ける現実には憤り、神の意思に服して殉教の道を選んだ。なぜ彼は殉教を決意したのか。なぜ殉教が不可避だったのか。それは、どんな意味で神の意思であり、そこに、どんな神の約束があったのか。次は、1つの意味世界である。

殉教作戦

「殉教作戦は抵抗の一形態である。我々はロケットも戦車もない。イスラエル軍はどこでも構わず攻撃してくる。殉教作戦はイスラエル軍の攻撃を阻止するための対抗措置だ。・抑圧され、日々、家族や同胞を殺されている人間が対抗できる武器をもたない場合に、土地や民衆を守るために殉教作戦を行う。日本人のパイロットが米国の艦船に体当たりした神風作戦と同じ方法だ⁽¹¹⁾。・コーランの『悔い改めの章』には、神の道のために自らをささげた者は天国に行く、とある。・自殺は人生の困難から逃避する行為だが、殉教者は人生の威厳を保っている。殉教者は信仰を持つ者であり、神のために自らを犠牲にする者だ。・我々が標的にしているのは、イスラエル兵であり、入植者だ。イスラエルの民間人が殺されてしまうのは、間違いからだ。・無実の民間人を殺すことはイスラムが禁止している。主な標的はイスラエル軍だが、殉教者が兵士に近づけないために、そのような攻撃になったのではないか。」(アフマド・ヤシン師 ハマス創始者) [朝日新聞, 2001.9.15]

ここで、ハマスのコーラン解釈の正誤や殉教作戦への賛否が問題なのではない。このようなハマスの信条に共鳴するパレスティナ人が多いという事実が、重要となる。ハマスは、1987年に結成された。対イスラエルの抵抗運動で、PLOと一線を画す独自路線を歩む。活動の中心を、イスラエル占領地域(ガザ、ヨルダン川西岸)での武装闘争に置く。中核メンバーの人数は不明であるが、支援者やシンパは数万人に及ぶという。戦いの目標は、占領地域からイスラエルを放逐し、イスラム教主導のパレスティナ国家を樹立することである。ハマスは政治闘争、テロを含む武力闘争の両面の活動を行っている。他方ハマスは、モスクや社会サービスの施設を通して活動している。そしてメンバーを募集し、活動資金を集め、組織活動、宣伝活動を行っている。ハマスへのパレスティナ人の支持は大きい。[ホームページYahoo「自爆テロ」2005.9]

ジハードと殉教

イスラム共同体が<敵>の侵入を受けた時、イスラム教徒は<敵>と戦うが、その際、神はイスラムにこそ栄光をもたらすという信念が、イスラム教徒を戦いに鼓舞する。その信仰にあっては、<敵>の優勢は、自らの反省に直結する。つまり、イスラム教を疎かにしたからこそ、<敵>の優勢という天罰が下ったと考えられる。現代のイスラム主義は、1967年の第三次中東戦争におけるアラブ諸国の敗北を契機に興隆したといわれる。80年代以降、防衛ジハードの思想が、広範なイスラム教徒に受容されていく。…イスラム法のジハード理論は、支配地を拡大する時の「拡大ジハード」と、侵略者を撃退する時の「防衛ジハード」に分かれる。防衛ジハードは、すべての成人イスラム男子の義務とされ、武装した異教徒が現れた時は、侵略者を撃退すべく、生命・財産・言論を捧げて抵抗しなければ

ならない。それによれば、イスラム支配地であったパレスティナ（「イスラムの家」）に建国されたイスラエル（「戦争の家」）は、侵略者となる。イスラエルに対するテロは、ここに発する。

イスラム法は、人間の生と死を、次のように定める。神の道（ジハード）に倒れたもの（殉教者）は、神の身元で恵みを受け、天国で平安の内に永遠の命を送ることができる。正しき信仰者は、死の天使によって天国へ導かれる。不信仰者は、死も生も許されない地獄の苦しみを味わう運命にある。殉教のジハードは、イスラム教徒にとって最大の荣誉であり、だれもが望むべきものである。死は神が定めたところのものであり、何人も、その予定する前に死んではならず、自殺は許されない。しかしこの自殺も、信仰のため、殉教のためなら、よいどころか、最高の行いとなる。

しかし、たとえ殉教者は天国に迎えられるという約束があったとしても、防衛ジハードの思想に、実際に殉教を行わせるまでの力はない。イスラムの若者が防衛ジハードに加わる最大の理由は、彼・彼女らが<敵>と戦わないかぎり、近親者や同胞が殺され続けると信じているからである。世界各地でイスラム教徒が殺され続け、それを悲しみ憤る人々がいるかぎり、防衛ジハードの嵐が収まることはない。[ホームページYahoo「ジハード」の「飯島正人 イスラム原理主義とジハードの論理」2005.9]

このような「ジハードと殉教」論の教義上の正誤を問う知識は、筆者にはない。かりにそれが正しいとして、そこには、イスラム教徒が納得し、彼・彼女らを殉教に駆り立てる、鮮烈な価値世界がある。<敵>に侵略され、同胞が殺され続ける世俗の苦難が、神の目を介して解釈される。そして、人間の悲痛が神の悲痛になり、人間の怒りが神の怒りとなる。こうして殉教は、内発的に選択された行為となる⁽¹²⁾。

結：権力と価値

本稿は、まず、テロリズムの権力論的分析を試みた。次に、殉教作戦の意味論的分析を試みた。国家は、テロを定義する権力をもつ。国家は、反抗者の暴力をテロと呼び、自らの暴力を「反テロ」と呼ぶ。その時、一方で、テロの概念が肥大化する。他方で、自らの暴力の意図を隠蔽する。テロの一般的定義は、容易でない。どんな暴力をテロと呼ぶかは、暴力の主体・目的・背景・手段・結果・影響を考慮し、個別に行うしかない。テロの理解は、合理的でなければならない。同時にテロの理解には、価値判断が介在する。まず、暴力の倫理的な正当性をめぐる価値判断である。次に、暴力の手段的な妥当性をめぐる価値判断である。

テロリズムの理解は、内在的でなければならない。本稿では、パレスティナ人の殉教を例に、パレスティナ人の価値世界の一端を覗いた。パレスティナ人は、自らの苦難をどう解釈しているのか。なぜイスラエル（やアメリカ）と戦うのか。その戦いは、なぜ殉教という形を取るのか。どのように殉教を決意するのか。その際、神・生・自分の死・他人の死は、どの

ように理解されるのか。これらを問い、それではじめて、パレスティナ人を内発的に殉教に駆り立てる価値世界が見えてくる。その過程で、私の、パレスティナの価値世界に対するオリエンタリズムの無知が、暴かれていく。

【注】

- 1) 2005年7月7日、ロンドンの中心街で同時多発の爆破事件が起きた。走行中のバスや地下鉄で複数の爆破が起き、50人以上の死者と300人以上の負傷者が出た。
- 2) 日本における「拉致はテロだ」という言説も、北朝鮮の国家犯罪をテロと見做す、テロ概念の拡張である。北朝鮮は「テロ国家」とされる。そこに、強烈な「邪悪」の意味が込められている。
- 3) 加藤は、国家の枠内に留まるテロを「近代テロ」、国際社会に跨るテロを「現代テロ」と呼んだ〔加藤2002:40〕。
- 4) アメリカ国務省は、テロを「政治又は社会的目的を達成しようとして敢行される、政府、一般市民またはそのあらゆる部分を威嚇又は威圧する為の、人又は財産に対する強制力又は暴力の違法な使用」(連邦法18章2331)と定義する。日本の公安調査庁は、テロを「国家の秘密工作員または国家以外の結社、グループがその政治目的の遂行上、当事者はもとより当事者以外の周囲の人間に対してもその影響力を及ぼすべく非戦闘員またはこれに準ずる目標に対して計画的に行なった不法な暴力の行使」〔公安調査庁1993、『国際テロリズム要覧』〕と定義する。ここで非戦闘員とは、市民(一般民間人、丸腰・非番の警察や軍関係者)を指し、「これに準ずる目標」とは、資産、建造物を指す。国務省も公安調査庁も、テロの定義を最大限拡張している。この場合、労働組合の「違法スト」はテロだろうか。
- 5) 1996年、オルブライト国務長官は、「イラクに対する経済封鎖がイラクの子ども50万人を殺す結果となった。それはイラクに圧力をかけるために、<払うに値する値段>であった」と述べた〔松葉2003.3:73〕。ついでに、北朝鮮が経済制裁されたら、多くの子どもが餓死することになりはしないか。
- 6) 近代国家・市民社会・テロリズムをめぐる原理的・哲学的な問題については、稿を改めて、メルロ・ポンティ、デリダ、ハンナ・アレント、サイド等の西欧の思惟を検討しつつ、行いたい。
- 7) 臼杵陽は、新聞に投稿したテロについての論文が、テロ擁護と見做され、掲載を没にされた経緯を述べている〔臼杵2001.10:97-98〕。本当は、国家でさえ、<敵>を討つには<敵>を知らなければならない。
- 8) 2003年3月にイラク戦争が始まって05年9月現在で、アメリカ軍兵士1931人、イラク人4万人以上の死者が出たという〔寺島2005.10.7〕。この死者数の圧倒的な差が、アメリカ人とイラク人の生と死の非

対称性を如実に物語る。

- 9) 国家が「無差別テロ」を行った時、犠牲者が自国民であれ、他民族であれ、国家は、それへの非難を抑圧する。国家にはそれができる。それができない時、国家は危機に陥る。国家の優柔不断や判断ミスが国家転覆の革命を導いた事例は、少なくない。国家は、つねに断固たる「反革命」でなければならない。
- 10) 「笑い話にしかならない戦時中の日本軍による風船爆弾が、もしマンハッタンに落下していたら、当時の多くの日本人は快哉の声を挙げたであろう。特攻隊も自爆テロもそこにある精神性とそれを支える『敵』の理解はまったく変わるところがない」[小倉 2001.10:167]。
- 11) 殉教作戦は、しばしば日本の特攻作戦に譬えられる。しかし、殉教と特攻の精神は異なる。殉教は、「イスラムの家」を守るための防衛ジハードという宗教的行為である。その行為は、内在的・自発的である。これに対して、特攻は、世俗的国家への自己犠牲的な奉仕である。その行為は、軍の命令によるもので、外在的・他律的である [飯塚 2002]。しかし、特攻精神の美学がイスラムの聖戦に大きな影響を与え、殉教作戦という自爆攻撃を導いたという説がある [加藤 2002:63-65]。1972年5月30日、イスラエルのテルアビブ空港で、日本赤軍の3人が自動小銃を乱射、旅行者ら24人が死亡し、日本赤軍の2人がその場で自殺した。この事件が、特攻精神がパレスティナで知られるに至るきっかけになったという。
- 12) 中田考は、テロリズムをめぐる西欧的考えとイスラム的考えを比較検討し、前者が、自らが掲げる普遍的正義を、それを認めない者にも強制しなくては安心できず、他者に押しつけることに神経症的に固執するのに対して、後者は、自らが普遍的正義だと信ずることが「間主観的」合意を達成できないことを前提に、脱イデオロギー的な最低限の秩序形成による共存の道を模索しているとした [中田 2005.4]。

【参考文献】

- 飯塚正人, 2002, 『『イスラム原理主義』とジハードの論理』板垣雄三編 『「対テロ戦争」とイスラム世界』岩波書店 1-22 (ホームページ「ジハード」転載)。
 鶴飼哲, 1998.9.28, 「欧州を襲った内戦的状况」毎日新聞 (東京版)。
 鶴飼哲, 2003.3, 「地獄への道は善意で敷きつめられている～来るべき『テロリズム批判』のために」『現代思想』31-3 「特集 テロとは何か」、青土社 44-56。
 白杵陽, 2001.10, 「世界はムスリムを見殺しにするのか?」『現代思想』29-13 青土社 96-100。
 太田昌国, 2003,3, 『「テロ」をめぐる断章』『現代思想』31-3 青土社 184-189。

- 岡真理, 2001.10, 「私たちは何者の視点で世界を見るのか」『現代思想』29-13 「特集 これは戦争か」、青土社 105-110.
- 岡真理, 2002, 「ヤー、アフガーニスタン、ヤー、カーブル、ヤー、カンダハール……私たちは何者の視点によって世界を見るのか」藤原帰一編著『テロ後—世界はどう変わったか』岩波書店 54-77.
- 小倉利丸, 2001.10, 「殲滅されるべきは戦争である」『現代思想』29-13 青土社 166-171.
- 加藤朗, 2002, 『テロ—現代暴力論』中央公論新社.
- 加藤朗, 2005.4, 「ニヒリズム・テロの病理」『大航海』54 「特集 テロの本質」新書館 115-121.
- 姜尚中, 2001, 「『私』たちと『ポストコロニアリズム』(植民地主義後)」姜編著『ポストコロニアリズム』作品社 1-5.
- 栗田禎子, 2001.10, 「『テロを支援するシステム、国家』の正体」『現代思想』29-13 青土社 101-104.
- 小林誠, 2003.3, 「システム特性としてのグローバル・テロリズム」『現代思想』31-3 青土社 100-111.
- 酒井隆史, 2004, 『暴力の哲学』河出書房新社.
- 坂本義和, 2002, 「テロと『文明』の政治学—人間としてどう応えるか」藤原帰一編著 前掲書 1-28.
- ジャック・デリダ, 2003, 『ならずもの—理性に関する一つの試論』の部分訳 逸見龍生訳, 2003.6, 「ならずもの」『現代思想』31-7 青土社 102-108.
- 寺島実郎, 2005.10.7, 「脱9・11への転換」朝日新聞(大阪版).
- 土佐弘之, 2003.3, 「『テロリズム』の語られ方—そして、死者、神の声を領有する権力」『現代思想』31-3 青土社 80-99.
- 中田考, 2005.4, 「イスラームとテロ」前掲誌『大航海』99-107.
- 西谷修, 2002, 「これは『戦争』ではない—世界新秩序とその果実」藤原帰一編著 前掲書 29-53.
- 藤原帰一, 2002, 「アメリカの平和—中心と周辺」藤原編著 前掲書 222-247.
- 松葉洋一, 2003.3, 「国家テロリズムあるいはアメリカについて」『現代思想』31-3 青土社 68-79.
- 最上敏樹, 2002, 「衝撃の法的位相」藤原帰一編著 前掲書 206-221.

(あおき ひでお: 都市社会学研究所)